

天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために夜明けに出かけて行った。主人は一日につき一デナリオンの約束で労働者をぶどう園に送った。また九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし彼らも一デナリオンずつであった。それで受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いた私たちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』このように後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。

「朝から丸一日働いた人が約束通りの賃金を受け取った。夕方からほんの少しだけ働いた人も同じだけもらった。たくさん働いた人が文句を言った。しかし主人は取り合わなかった」マタイ福音書二〇・15、16は、そういう話です。

この譬え話を読んでつまずく人は多いようです。二人のクリスチャンが、それぞれ逆方向につまずきました。

一人は企業経営者です。被雇用者を思い遣り、「賃金は労働の対価であるはずだ。同一労働同一賃金を目指すべきだ、キリスト教は現実離れしている」と、教会から離れて行きました。

もう一人は人権活動家です。この譬を「富の再配分」という共生のテクニクと捉え「イエスの言う通りだ、社会的弱者と共に生きるべきだ」と言いました。「イエスは正しい」と神さまを評価し判定する時の彼は、神への畏れを失っています。自分は神以上の存在です。その結果、自分の意見に賛成する人が正義、考えの合わない人を敵とみなし、「教会は人権保護に生ぬるい」と、やはり教会から離れて行きました。

今日の話は天国の譬です。その経営者も活動家も、天国に行ったら天国は不愉快な場所でしょう。

斯く言う私も、企業経営者と同じ疑問は感じます。しかしこの譬の意味が少し理解できたという思いを、信仰に入ってから二度、経験しました。

最初は二〇年前のことです。高知で牧師をしていた時の、隣の教会の牧師さんの話を聞いて感じました。

たいへん繊細な人です。都会の大きな教会でうつ病を発症しました。教会を辞任し、数年療養して軽快し、高知に來ました。

彼曰く「聖書では、たくさん働いた人が少し働いた人を妬んでいる。けれども自分は療養期間中、たくさん働く人たちが妬ましかった。あの頃を思えば、賃金は同じでも、私は朝から働かせてもらいたい」。なる程と思いました。企業経営者からも人権活動家からも出てこない発想です。

二度目は一昨日です。教会附属の平塚二葉幼稚園は、毎朝、教職員の祈祷会で始まります。そこでの祈りの言葉遣いには、クリスチャンでない教職員にも、昭和の信仰深い祈りの伝統が引き継がれています。

多くの人が「一夜の休息を与えられ、また職場に集えましたことを感謝いたします」という言葉で朝の祈りを始めます。これは人間が働くものであることを前提に気が付きました。

人は働くものであり、夜は翌日の労働のために休む。思い煩いもある中、昨晩はゆっくり休むことが出来た。だから「また職場に集えたことを感謝する」という祈りです。

人は神のために働くという発想は、昭和の教会幼稚園に、サーブス労働をさせる風土を作りました。今はそれを改善させようとおんとオフのメリ張リをつけるよう求めます。

それでも幼児の魂をまもり育てる仕事です。労働を時間単位で切り売りするのは違います。「また職場に集えた」という感謝は、「また労働時間分稼げる」という意味ではありません。「人の本来のありかたの通りであれた」という感謝です。

繊細すぎて病気になった牧師さんは、朝から働いている労働者を羨ましがりました。それは人間の本来のありかたの通りに生きることへの憧れだったのです。

人生一〇〇年時代と言われますが、企業の定年は健康寿命に追いついていません。「一夜の休息が与えられ、また職場に集えた」とは、今、多くの人が共感できる感謝ではないでしょうか。

今日の聖書は天国の譬です。仮に天国にも時間があるとしたら、天国にいる時間は一〇〇年よりも更に長いはずです。天国で、この主人の下で働くなら「どうせ給料は同じだから」と、最初は夕方五時から働いても良いでしょう。昼間はブラブラしましょう。でも間違っても、だらしない生活を一〇〇年は続けません。自分で自分が厭になり、ぢきに「一夜の休息が与えられ、また職場に集えた」という思いが懐かしくなります。だらしない生活は、年間、二、三週間で充分です。それだけ休めば、朝から人の役に立ちたくなるだろうと思います。

主イエスは、この譬え話で人間本来の生きかたこそ幸せであることを知らせてくださいました。

神から与えられた職場は、賃金がもらえる所ばかりではありません。リタイアした人でも、人を愛し人のために祈るべき立場は、神の与え給うた職場です。

「一夜の休息が与えられ、また職場に集えたことを感謝いたします」と、毎朝そういう思いになることが出来たら、私どもは毎日、天の御国の生き方を取り戻しているのです。